

『唐詩選畫本』考

— 詩題と画題について

A Study on “The illustrated Book of Tang Dynasty’s Poem”

張 小 鋼

Zhang Xiaogang

宋の蘇東坡は唐の王維の「藍田煙雨圖」を評論した際、次のように詩と絵との関係を指摘している⁽¹⁾。

味摩詰之詩，詩中有畫，觀摩詰之畫，畫中有詩。（摩詰の詩を吟味すると，詩の中に絵がある。摩詰の絵を鑑賞すると，絵の中に詩がある）

すなわち，詩と絵は互いに融合しあう関係がもっとも理想的である。それは詩題と画題にとってもいえることであろう。江戸時代において、『唐詩選畫本』は『唐詩選』の詩に絵を配し、『唐詩選』の流行に大きな役割を果たしていた。しかしながら，詩題と画題との関係は必ずしも理想的な状態ではないと思われる。本文では『唐詩選畫本』と『唐詩選』との関係を考察することによって，詩題と画題との関係を考えたい。また『唐詩選畫本』における『唐詩畫譜』の影響関係を通じて，日中の詩題と画題についての考え方の相違を分析してみたい。

一、『唐詩選畫本』の編集過程

明の李攀龍（1514～1570）の編集とされる『唐詩選』がいつ日本に伝えられたかはよくわからない。少なくとも大庭修氏の『舶載書目』

には見当たらない⁽²⁾。しかしながら，江戸時代において、『唐詩選』がたいそう流行っていた。中島敏夫氏の「本邦刊『唐詩選』書目」表1によると⁽³⁾，江戸時代に四十二種類の『唐詩選』が刊行されたという。その大きな原因は荻生徂徠をはじめとする古文辞派の推奨によるものである。とりわけ服部南郭の訓点本の刊行により、『唐詩選』は唐詩の普及に大きな役割を果たしたに違いない。

また，村上哲見氏の調査では『唐詩選』の版本の種類が三十一種確認できたが，十四種が確認できなかった。可能性としては四十五種類があるという⁽⁴⁾。

清の紀昀は『唐詩選』が偽書であることを指摘しているが⁽⁵⁾，日本には偽書を否定する意見が根強く存在する。諸先達の研究を重ね，最近，有木大輔氏の『唐詩選版本研究』（好文出版，2013年）という労作が出版され，大変興味深い研究である。

『唐詩選畫本』は前掲の四十二種類の『唐詩選』の中のひとつで、『唐詩選』のビジュアル版として位置づけられることが分かる。『唐詩選畫本』はまた『唐詩選繪本』、『畫本唐詩選』とも称す。ここでは『唐詩選畫本』に統一する。『唐詩選畫本』より前に『唐詩選』

の絵本があったであろうか、それについてよく分らないが、宝暦三年（1753）、西川祐尹の『繪本唐詩仙』が刊行された⁽⁶⁾。この絵本についての記録はあるものの、その存在はまだ確認できていない。もしかしたら「仙」と「選」の発音が同じであるので、『繪本唐詩選』ではないかと推測される。となると、それは比較的に早い時期に現れた『唐詩選』の絵本かもしれない。ちなみに高木正一氏の『唐詩選』「あとがき」によると、『唐詩選』の和刻本が確認できたのは早稲田大学が保存している服部家の寛保三年（1743）の再版本で、享保九年（1724）の初版本の所在がわからないという⁽⁷⁾。有木大輔氏の『唐詩選版本研究』

にもこの問題に触れなかったもので、どうやらなかなか難問のようである。ともかく、西川祐尹の『繪本唐詩仙』が『唐詩選』和刻本の初版本より二十九年遅れて刊行されたということを見ると、時間的には合理性がある。

『唐詩選畫本』の出版時期は『繪本唐詩仙』より遅れている。その編集過程も比較的に複雑である。全部で七編三十五冊とあるが、断続的に江戸の嵩山房により刊行されたため、絵師も異なれば、時期も異なる。今筆者が所蔵している『唐詩選畫本』（文化乙丑[1805]再刻本）に基づき、時間順に次の【表1】に整理してみる。

【表1】

編 次	時 間 順	作 者	序文・跋文
一編（五言絶句）	天明8年[1788] 文化2年[1805]再刻	石峯先生書畫	畫本唐詩選自序（天明戊申臘月石峯道人橘貫畫並讀） 書畫本唐詩選後（天明戊申之臘，嵩山房小林高英識）
續編（七言絶句）	寛政2年[1790] 文化11年[1814]再板	芙蓉先生畫 （鈴木芙蓉）	自序（己酉[1789]秋八，芙蓉老人撰） 書畫本唐詩選後（寛政元年己酉新秋九月，嵩山書房小林高英識）
三編（五言律・五言排律）	寛政3年[1791]	高田圓乘 （谷文晁の師）	題唐詩畫譜（寛政三年辛亥三月，君山唐世濟識） 自序（高田圓乘撰）
四編（七言絶句續編）	寛政5年[1793]	紅翠齋主人畫 （北尾重政）	序（寛政壬子仲冬南？日，天華樓主人） あとがき
五編（五言古詩・七言古詩）	天保3年[1832]	高蘭山先生著 翠溪先生畫	畫本唐詩選叙（天保二年辛卯仲秋望高井蘭山述）
六編（五言律・五言排律）	天保4年[1833]	高井蘭山著 前北斎爲一畫	繪本唐詩選五七言律序（天保壬辰[1832]季春高井蘭山識）
七編（七言律）	天保7年[1836]	高井蘭山先生著 畫狂老人己翁筆	唐詩選圖會序（天保壬辰孟夏東武南郊伊皿子隱士高井蘭山叟述）

【表1】を見る限り、1788年から1836年まで七編を完成するまで四十八年間の歳月を費やしたのである。一編の第一冊には「嵩山房小林高英」と署名する『書畫本唐詩選後』という跋文がある。その跋文には『畫本唐詩選』

を刊行する経緯を次のように述べている⁽⁸⁾。

高英四世之祖歳仲者，以春臺南郭二先生撰著，皆藏於舗裡，故其爲嵩山房著矣，賜顧諸君子，月日進哩，其後祖君先人，相繼刻唐詩選者，凡十餘種，特欠画而已，盖祖文由，

嘗欲盡備以承歲仲之意，乃謀石峯先生，而性多病，未果而逝矣，父祐之亦不果而逝矣，嗚呼哀哉，故余遂得請先生上梓焉，是欲承父祖之意者而已，庶幾補其欠乎，先生又善書，則亦請書詩於其傍，先生退遜，辭以不堪罪梨棗，余固請曰，是非高英之請也，歲仲文由之請也，先生於是諾，此舉也，非發乎余肚裏也，且或南郭先生之忠臣，而余家之孝子乎，故聊書其傳於後而已。天明戊申之臘 嵩山房小林高英識（高英四世の祖である歳仲は，春臺，南郭二先生の著書を舖に所蔵している。もともとそれは嵩山房のために著したものである。諸君子に愛顧を賜り，日進月歩。その後先祖が相次いで『唐詩選』を刻し，およそ十余種類ある。だが絵だけは欠いている。そのため，祖父文由がかつて歳仲の遺志を受け継いでそれを揃えたいので，石峯先生に相談することにした。だが体が多病で，目的を果たせず逝去された。父裕之も果たせず逝去された。嗚呼，故に今度余が先生に依頼して上梓することにした。それは父祖の意を受け継ぎたいにすぎないからである。間もなくその足りない分を補足した。先生は書も得意で，余はまた先生に詩をその（絵の）傍らに書いていただくことにした。先生は謙遜して載せるほどのものではないと辞退したが，余は強く懇願した。「高英の私からの願いではなく，歳仲，文由の願いです」と。すると先生は受諾してくれた。その企画は私の発案ではなく，あるいは南郭の忠臣で，かつ余の家の孝子ではないであろうか。故にここに書き，後に伝えるためである。天明戊申[1788]の臘[陰暦12月]嵩山房小林高英記す）すなわち，小林高英の四世の祖である歳仲という人が太宰春臺と服部南郭の著書を所蔵している。それは嵩山房のために著したものである。後に代々『唐詩選』を刊行し，およ

そ十数種ある。唯一残念なことに，『唐詩選』の絵本がないことである。故に高英の祖父である文由は先祖歳仲の遺志を継ぐために，石峯先生に相談を持ちかけた。しかしながら，祖父は間もなく病死した。父親である祐之も絵本の刊行を叶えなく病死した。故に，高英が引き続き石峯先生に依頼し，この『唐詩選畫本』の刊行を実現させたという。

『唐詩選畫本』の編集過程は，大体二つの段階に分かれる。第一段階は天明8年(1788)～寛政5年(1792)の五年間で，石峯先生，芙蓉先生，高田圓乗，紅翠齋主人によって編集した一編～四編である。内容としては五言絶句，七言絶句，五言律，五言排律とある。第二段階は天保3年(1832)～天保7年(1836)の四年間で，高井蘭山，翠溪先生，前北斎爲一，畫狂老人叚翁によって編集した五編～七編である。前北斎爲一と畫狂老人叚翁は皆葛飾北斎のことで，事実上高井蘭山，翠溪先生と葛飾北斎三人で編まれたのである。内容としては五言古詩，七言古詩，五言律，五言排律，七言律とある。第一段階と第二段階との間は四十年のブランクがある。その原因はよく分らないが，四十年ぶりに刊行された五編に高井蘭山の『畫本唐詩選叙』にも嵩山房の依頼により編まれたとの説明にとどまるだけである。第二段階には嵩山房の小林新兵衛が『唐詩選畫本』の編集を再開した。彼には小林高英のように序文や跋文を書かなかったようで，一編，続編，三編，四編の第五冊の後ろに皆「小林新兵衛蔵板」と，五編，六編，七編に「小林新兵衛」だけと記している。前者は版木を所蔵する意味で，後者はマネジメントする意味もあるであろう。その小林新兵衛は小林高英の後に継いだ人物と思われるが，小林高英とはどんな間柄かはよくわからない。そして小林高英はその時期に存命していたかどうかともよく分らない。

『唐詩選畫本』は絵本というまでもなく 原詩に絵を配した状況を次の【表2】にまとめてみる。
『唐詩選』の詩に絵を配したものである。その

【表2】

	『唐詩選』（7巻3冊）		『唐詩選畫本』（7編35冊）		備 考
詩体	巻数	詩の数	編数	詩の数	
五言古詩	巻一	14首	五編	14首	
七言古詩	巻二	32首	五編	20首	欠12首
五言律	巻三	67首	三編 六編	21首 46首	
五言排律	巻四	40首	三編 六編	7首 6首	計13首 欠27首
七言律	巻五	73首	三編 七編	5首 40首	計45首 欠28首
五言絶句	巻六	74首	一編	74首	
七言絶句	巻七	165首	續編 四編	77首 88首	
		計465首		計398首	欠67首

この表を見ると、大変興味深い事がいくつかあるが、次のようなことを指摘することができよう。

(1) 465首の詩に対し、絵が398点の絵しか対応されていない。67首の詩には絵が欠けていることがわかった。従って完全なものとは言えない。ただし、一編と續編・四編は五言絶句と七言絶句の絵を完全に完成したのである。一編と續編の石峯先生、芙蓉先生のことは不詳である。四編の紅翠齋主人は北尾派の祖とされる北尾重政（元文四年～文政三年、1739～1820）の号である。

(2) 『唐詩選畫本』の編集順次は『唐詩選』の巻数順次と異なる。たとえば一編は巻六にあたり、二編は巻七にあたる。すなわち小林高英は五言絶句、七言絶句といった優先順位で企画したかもしれない。絶句は律詩や古詩より短く、四行だけであるため、一般の読者にとって扱いやすいと思われる。

(3) 『唐詩選畫本』の編集は、絶句、律、排律、古詩といった順序で完成したものではなく、ばらつきが見られる。この現象は続編

からすでに始まった。続編は165首の七言絶句に対し、77点しか絵がなかった。残りの88首は四編によって揃えられた。三編は五言律の40首に対し21点、五言排律の40首に対し7点、七言律の73首に対し5点の絵の形で編集され、後に六編、七編によって46点、6点、40点という形で補ったのである。しかしながら、それにしても五言排律は27点、七言律は28点が欠けている。言い換えれば、1791年から1833年まで四十三年間を経ってもそろえられなかった。そして五編の七言古詩は12首が欠けたままであった。全体的には『唐詩選』の465首に対し、『唐詩選畫本』が398点の絵だけで、67点の絵が足りない。それは一つの欠陥と言わざるを得ない。具体的に67首の題目は次の通りである。

○五言排律 (27首)

贈蘇味道，酬蘇員外味玄夏晚寓直省中見贈，奉和幸長安故城未央宮應制，奉和晦日幸昆明池應制，和姚給事寓直之作，早發始興江口至盧氏村作，同錢楊將軍兼原州都督御史中丞，奉和聖製途經華嶽，奉

和聖製早度蒲關，和許給事直夜簡諸公，
酬趙二御史西軍贈兩省舊寮之作，奉和聖
製送尚書燕國公說赴朔方軍，奉和聖製暮
春送朝集使歸郡應制，送李太守赴上洛，
送秘書晁監還日本，陪張丞相自松滋江東
泊渚宮，送柴司戶允劉卿判官之嶺外，陪
寶侍御泛靈雲池，行次昭陵，重經昭陵，
江陵望幸，奉觀嚴鄭公廳事岷山沱江圖，
冬日洛城北謁玄元皇帝廟廟有吳道士畫五
聖圖，聖善閣送裴迪入京，奉使巡檢兩京
路種果樹事畢入秦因詠歌，行營酬呂侍御，
送鄭說之歙州謁薛侍御

○七律 (28 首)

西掖省郎事，九日使君席奉錢衛中丞赴長
水，首春渭西郊行呈藍田張二主簿，暮春
虢州東亭送李司馬歸扶風別廬，萬歲樓，
題張氏隱居，宣政殿退朝晚出左掖，紫宸
殿退朝口號，曲江對酒，望野，登樓，秋
興四首，吹笛，閣夜，返照，登高，闕下
贈裴舍人，和王員外晴雪早朝，自鞏洛舟
行入黃河即事寄府縣寮友，贈錢起秋夜宿
靈臺寺見寄，長安春望，陸勝宅秋雨中探
韻同前，鹽州過胡兒飲馬泉，登柳州城樓
寄漳汀封連四州刺史，奉和庫部廬四兄曹
長元日朝迴

○七言古 (12 首)

胡笳歌送顏真卿使赴河隴，崔五丈圖屏風

賦得烏孫佩刀，答張五弟，孟門行，贈喬林，
湖中對酒作，城傍曲，洪州客舍寄柳博士
芳，春江花月夜，吳官怨，帝京篇，餘杭
醉歌贈吳山人

以上の詩題を見るかぎり，必ずしも難しい
詩題ばかりではない。編集者の取捨基準が作
品の難易度によるものではないことはわかっ
た。たとえば最も扱いにくい「応制詩」はむ
しろ大量に絵画化された。それは絵師の高度
なレベルを示している。結局，どういう基準
で取捨したのかは謎である。

【表2】から，我々は嵩山房の経営方針を
垣間見ることができる。すなわち，『唐詩選』
の巻数順番ではなく，読者が扱いやすい絶句，
律，排律といった順序で編集していく。こう
した目的は販売しやすいために違いない。ま
た，編集の過程に見られるばらつきの結果と
して，絵の数が足りなかったものの，『唐詩
選畫本』の詩のジャンルが一応揃えられるよ
うに見える。揃った方が売りやすいだろうと
いう思惑も見え隠れである。店主小林高英の
経営手腕はなかなか並大抵のものでないこと
がよくわかる。

『唐詩選畫本』には一編と三編を除き，各
編の各々の巻に題目が付け加えられた。次の
【表3】にまとめてみる。

【表3】

	第1冊	第2冊	第3冊	第4冊	第5冊
一編 (五言絶句)					
續編 (七言絶句)	鴻雁	黄雀	槐天	春風	胡笳
三編 (五言律・五言排律)					
四編 (七言絶句續編)	聞笛	春昂	楊柳	雨鈴	宮詞
五編 (五言・七言古詩)	或古	飲酒	歌舞	江上	乘黄
六編 (五言律・五言排律)	朋闕	少婦	金僊	秋風	琴樽
七編 (七言律)	春燕	雲漢	閨闔	茵跂	縁分

【表3】を見ると、各巻の題目も不揃いであることがわかる。それは、編集者や絵師が変わるたびに、『唐詩選畫本』に対する考え方も変わったと思われる。すなわち編集者や絵師が単なる詩に絵を配することに満足できなくなったので、『唐詩選畫本』に対しより工夫しようとしている。そのために、題目を付け加えることによってより江戸の読者にインパクトを与えようとしたに違いない。ただし、それらの題目はほとんど詩句から抜き出したもので、必ずしも題目が冠する作品群をまとめる意味ではない。装飾の意味合いの方が強いであろう。

なお、398枚の絵のほかに、『唐詩選畫本』の一部の後ろに詩と関係のない絵をつけるのも一工夫と言えよう。全部で16点ある。次の通りである。

- ①三編五言律：泊夫藍（巻一）、椰子（巻二）、胡椒（巻三）、丁子（巻四）
- ②五編五言古詩：無題〔梅に鵲〕（巻一）、無題〔牡丹〕（巻二）
- ③五編七言古詩：無題〔蘭〕（巻三）、無題〔牡丹〕（巻二）
- ④六編五言律・五言排律：無題〔梅〕（巻一）、無題〔雨に鳥〕（巻二）、無題〔鹿〕（巻三）、無題〔雪に鴨〕（巻四）
- ⑤七編七言律：駝鳥（巻一）、駱駝（巻二）、萬年蟹（巻三）、仁魚〔鯉〕（巻四）

これらの絵も前掲の題目と同じく装飾の意味合いがあると思われる。六、七編の絵に対し、有木大輔氏は「北斎は六編の各冊の末に藍や椰子などの植物、七編に駝鳥や蟹などの動物の漫画を描く。これらは『唐詩選』と全く関係なく、北斎の遊び心がそうさせたのであろう」と指摘している⁽⁹⁾。それはまさにその通りである。ただし、それは北斎が自由がままに描いたのではなく、三編の高田圓乗、五編の翠溪先生がすでにそのような絵を描い

たのである。北斎は絵本の整合性を持たせる意図もあったとも考えられる。

二、『唐詩選畫本』における『唐詩畫譜』の影響

『唐詩選畫本』における中国畫譜の影響は少ないようである。明の黄鳳池の『唐詩畫譜』には片鱗が見られる。黄鳳池とその『唐詩畫譜』については、清の紀昀が『四庫全書総目』に次のように説明している⁽¹⁰⁾。

明 黄鳳池撰。鳳池 徽州人。是書刊於天啟中。取唐人五六七言絕句詩各五十首，繪爲圖譜。而以原詩書於左方。凡三卷。末二卷爲花鳥譜，但有圖而無詩。則鳳池自集其畫，附詩譜以行也。（明の黄鳳池が編纂するものである。鳳池は徽州（今日の安徽省）の人である。この書物は天啓年間（1621-1627）刊行された。唐の詩人の五言，六言，七言，絶句の詩をそれぞれ50首選び，図譜にしたのである。そして原詩を左側に書いた。凡そ三巻となる。最後の二巻は花鳥画譜である。図版はあるが，詩はない。それはすなわち鳳池が自らその絵を集め，詩譜に附し，刊行したわけである）

黄鳳池は集雅齋主人と自称し，編纂した八種の畫譜を『集雅齋畫譜』という。その中に『五言唐詩畫譜』と『六言唐詩畫譜』と『七言唐詩畫譜』は明の万暦年間（1573-1620）～天啓年間（1621-1628）の間に刊行され，合わせて『唐詩畫譜』となる。『唐詩畫譜』はいづ日本に伝えられてきたかはよく分らない。少なくとも大庭修氏の『舶載書目』には記載されていない。だが，日本では大変重視され，随分早い時期に覆刻された。クリストフ・マルケ氏は次のように指摘している⁽¹¹⁾。

日本では初めて覆刻された中国画譜は一六七二年の黄鳳池編『集雅齋畫譜』（『八種画譜』）ともいい，中国では一五七三年から一

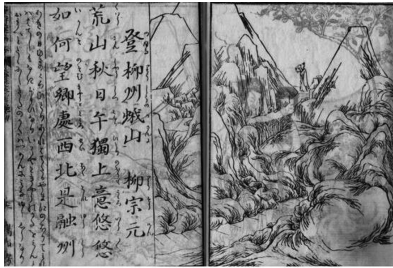


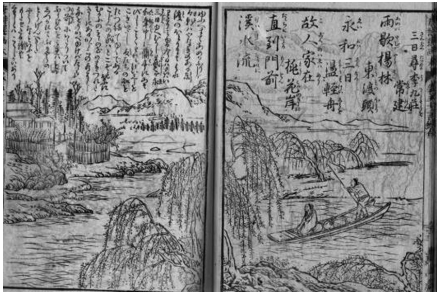


六二八年の間に刊行された)である。更に一七一〇年にもこの画譜は刊行されている。最初の覆刻本には二種類の版本があり、これによって『集雅齋畫譜』が日本で相当に広く流通していたことが分かる。

従って、1672年以前に『集雅齋畫譜』はす

でに日本に伝えられていたこととなる。『唐詩選畫本』における『唐詩畫譜』の影響は主として第一段階の一編五言絶句、二編七言絶句、四編七言絶句續編に集中している。第二段階の五、六、七編にはもうこのような影響関係が見られない。次に【表4】を見てみよう。

【表4】

No	画 題	唐詩選畫本 (図版1)	唐詩畫譜 (図版2)
1	四編畫本七言 (五 冊) : 西施石 畫譜五言 : 題西施石 ▲類似点あり。 ▲畫本七言は畫譜 五言を真似た		
2	一編畫本五言 (四 冊) : 左掖梨花 畫譜五言 : 左掖梨花 ▲類似点あり。		
3	一編畫本五言 (二 冊) : 竹里館 畫譜五言 : 竹里館		
4	一編畫本五言 (二 冊) : 春曉 畫譜五言 : 春曉		

5	一編畫本五言 (五冊): 登柳州蛾山 畫譜五言: 登柳州蛾山		
6	續編畫本七言 (一冊): 峨眉山月歌 畫譜七言: 峨眉山月歌		
7	二編畫本七言(五冊): 三日尋李九莊 畫譜七言: 三日尋李九莊		
8	四編畫本七言 (一冊): 春行寄興 畫譜七言: 春行寄興		
9	續編畫本七言 (二冊): 西宮秋怨 畫譜七言: 西宮秋怨 ▲類似点あり。		

10	四編畫本七言 (三 冊): 郡中即事 畫譜七言: 郡中即事		
11	四編畫本七言 (五 冊): 宿疎陂驛 畫譜七言: 宿青陽驛 ▲類似点あり。 ▲画題は異なり。		
12	四編畫本七言 (三 冊): 十五夜望月 畫譜七言: 十五夜望月 ▲類似点あり。		

以上、影響の痕跡が認められる絵はわずか5点あることがわかった。これは『唐詩選畫本』の398点の絵を考えると、その影響が微々たるものと言わざるを得ない。注意すべきことは、この5点の絵がいずれも部分的に類似し、完全な模倣ではなかった。また11番のように異なる画題を真似たものもあった。ほかに1番のように五言詩の画題を真似て七言詩の画題とした。従って、『唐詩選畫本』は一般の絵本によく見られるような完全に中国の絵を真似る絵柄とは一味違うのである。

なお、『唐詩畫譜』の詩題は150首で、量的には『唐詩選畫本』より遙かに少ない。これも「詩情」を「画意」に可視化する難しさを

物語っている。

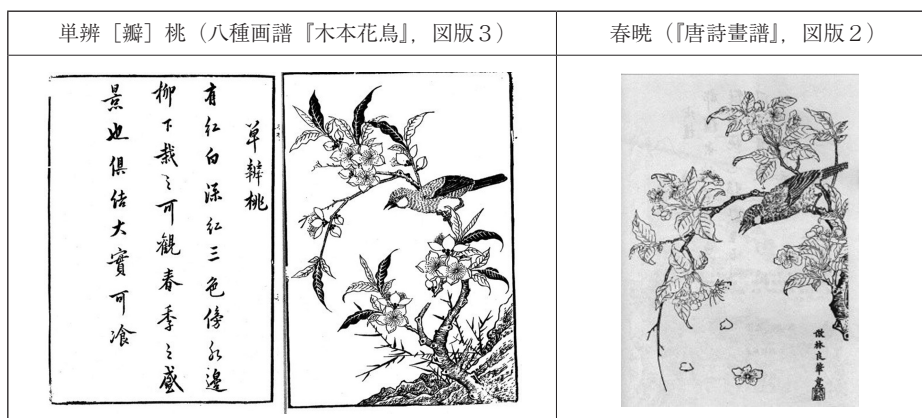
三、『唐詩選』の詩題と『唐詩選畫本』の画題

ところで、『唐詩選畫本』の画題を整理するにつれ、その画題が『唐詩選』の詩題との間に、どのような関係となっているのかも分析する必要があるようになった。前掲したように、『唐詩選畫本』は『唐詩選』のために絵を配するもので、398点の絵が描かれている。換言すれば、『唐詩選畫本』は398首の詩の境地を絵によって視覚化されるものである。「詩に絵があり、絵に詩がある」というのは詩と絵が相互補完的役割を果たしているのである。いわゆる「詩情画意」はまさにそ

の理想的な形で相乗効果が期待される。この場合、詩題は原則としてそのまま画題となっており、詩題と画題が合致している。しかしながら、いったん絵が詩から離れると、その画題が必ずしも合致していない。一つの例として、【表4】No.4の「春暁」という五言詩を挙げてみよう。次に引用しておく⁽¹²⁾。

春暁 しゅんげう まうかうおん
 春眠不覚暁 しゅんみんあかつき おぼ 春眠暁を覚えず。
 處處聞啼鳥 しよしよいてう き 處處啼鳥を聞く。
 夜来風雨聲 やらいふう う こゑ 夜来風雨の聲。
 花落知多少 はな お 花落つこと知ぬ多少ぞ。
 春、眠っている少婦は夜明けが分からず、あちこちの鳥の囀る声が聞こえてくる。よく考えると、昨夜の風や雨が激しかったので、

外の花はどれほど落ちたであろうという。これに対し、『唐詩畫譜』には一羽の鳥が木の枝に止まり、二、三枚の花弁が落ちていく、という画面である。もし、詩と切り離して鑑賞する場合、鑑賞者はおそらく「春暁」という詩と連想しかねるであろう。その代わりに「木に鳥」、あるいは、「花に鳥」という画題を名づけるかもしれない。実際にも『唐詩畫譜』「春暁」の絵は前掲の『八種画譜』の中の一冊『木本花鳥』にある「単瓣桃」（目次には「単瓣桃花」となっている）という画題の構図と極めて似通っている。故に画題の付け方により鑑賞者の理解の仕方も変わることはわかる。



その一方、『唐詩選畫本』には閨の少婦がまだ完全に目が覚めていない様子で、枕の上に伏して目目が閉じたままである。庭には二羽の雀が飛び遊んでいる様子、地面には木の葉っぱがいっぱい落ちてある……。この絵柄を見れば、たとえ詩が付いていなくても『春暁』の画意だとよくわかる。これは極端の例かも知れないが、画題と詩題とは必ずしも一致しないことがわかるであろう。

次に『唐詩選』の詩題と『唐詩選畫本』の画題との関係について検討してみたい。

1. 詩題はそのまま画題になる。たとえば、前掲の【表6】に取り上げている12例の絵のうち、「郡中即事」を除き、皆この部類に入られる。詩題を見ると、その詩の内容がわかる。従ってそのまま絵で表現できる。この場合、詩題は具体性があり、画像化しやすい。絵が詩から独立することができる。すなわち詩がなくても絵を理解することができる。

2. 詩題はそのまま画題になるが、詩題からは内容がわかりにくい。たとえば上記の

「郡中即事」はこの部類に入る。「郡中」(郡の中)はある程度わかるが、何の「事」かがわからない。従って絵が詩から独立しにくい。もう少し例を見てみよう。

詠史 (一編卷三, 五言絶句)
絶句 (一編卷三, 五言絶句)
贈楊侍郎 (四編卷二, 七言絶句)
楊柳枝詞 (四編卷三, 七言絶句)
塞上曲 (四編卷三, 七言絶句)
雜詩 (四編卷三, 七言絶句)
雨淋鈴 (四編卷四, 七言絶句)
涼州詞 (二編卷一, 七言絶句)
清平調 (二編卷一, 七言絶句)
從軍行 (二編卷三, 七言絶句)
寄孫山人 (二編卷五, 七言絶句)

「詠史」、「雜詩」、「塞上曲」、「從軍行」といった類の詩題は唐詩によくある共通の題目である。時には、同じ詩人が書いた「詠史」が数首あり、一組で(一)(二)(三)といった番号を付ける形である。従って単なる詩題だけでは内容はわからない。「楊柳枝詞」、「雨淋鈴」、「涼州詞」、「清平調」のような詩題は元々唐代楽府の曲名(「楊柳枝詞」の曲名は「楊柳枝」)で、やはり共通の題目である。また、「寄○○○」、「贈○○○」、「送○○○」といったパターンの詩題もよく見られる。いずれにせよ、これらの詩題はそのまま画題となるが、絵と詩は切り離しにくい。

勿論、例外もある。たとえば、『春暁』という詩題もその曖昧さが残っている。このような詩題はいろんな春の事柄を表現する可能性がある。従って画題としてもいろんな絵となる可能性がある。しかしながら、『春暁』は中国では婦人や子供も熟知しているので、ある意味では特定されている。すなわち閨中の少婦、小鳥、落ちた花はその絵の要素となる。そう言う意味で『春暁』はそのまま画題になる。

3. 詩題はそのまま画題になるが、予備知識がないと、今日の我々にはわかりにくい。たとえば「○○○応制」という詩題は多く見られる。次に例を見よう。

送沙門弘景道俊玄莊還荊州應制 (六編卷一, 五言律)
恩勅麗正殿書院賜宴應制得林字 (六編卷一, 五言律)
侍宴安樂公主新宅應制 (七編卷一, 七言律)
紅樓院應制 (七編卷一, 七言律)
再入道場紀事應制 (七編卷一, 七言律)
與慶池侍宴應制 (七編卷一, 七言律)
奉和春日幸望春宮應制 (七編卷二, 七言律)
奉和初春幸太平公主南莊應制 (七編卷二, 七言律)

「応制」とは皇帝の命を受け詩文を作る意味である。近藤春雄氏の『中国学芸大事典』「応制」の条に「天子の命を奉じて詩文を作るのをいう。六朝人は多く応詔といい、……唐宋人は多くは応制と称している。唐詩選所収の応制の詩などそれで、応制は律詩が主である。」との解釈がある⁽¹³⁾。多くの内容は宴会などの場で作られたものである。また「得○字」というのは詩を作る際、事前にある文字を決め、皆その字をめぐるって作るわけである。いわば一種詩の遊戯である。

4. 詩題はそのまま画題になるが、詩題の字数があまりにも多いので、一目で見えずぐわからない。特に画題として独立する場合、なかなかピンとこない。次に例を見よう。

和左司張員外自洛使入京中路先赴長安逢立春日贈韋侍御及諸公 (七編卷二・七言律, 28字)
大同殿生玉芝龍池上有慶雲百官共觀聖恩便賜燕樂敢書即事 (七編卷三・七言律, 26字)
奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制 (七編卷三・七言律, 23字)

言うまでもなく、『唐詩選畫本』はそもそも『唐詩選』のビジュアル版として、作られたものである。詩は主役で、絵は脇役である。詩と絵と一緒にする場合には何ら問題はない。しかしながら、我々は絵を主役として画題ということを考える場合、上記のような戸惑いが生じるであろう。

ここでもう一度『唐詩畫譜』と比較してみよう。『唐詩畫譜』の場合には短い詩題は圧倒的に多い。その詩題の字数の分布は次の通りである。

五言詩（50首）：1字2首，2字18首，3字8首，4字13首，5字6首，6字2首，9字1首

六言詩（57首）：2字41首，3字6首，4字5首，5字1首，6字3首

七言詩（50首）：2字10首，3字9首，4字14首，5字8首，6字6首，7字3首

五言詩から七言詩まではほとんど2字～4字に集中して、9字を超える詩題は一つもなかった。明らかに、編集者が『唐詩畫譜』を編集する際、画題を意識しながら取捨したに違いない。この点について『唐詩選畫本』と鮮明的に対照となっている。

五、おわりに

以上、『唐詩選畫本』について考察してみたが、とりわけ画題を中心に検討してみた。画題がどのように明快に詩意を伝えられるであろうか。それはおそらく画題を研究するうえ、避けて通ることができない。

実際に江戸時代ではすでに編集者の試みが見られた。たとえば大岡春卜が『畫史會要』（寛延4年〔1751〕刊本）の目次に「○○○筆 唐詩ノ意図」という画題に統一し、さらにそれぞれの絵に唐詩を二句付け加えるという形を取った⁽¹⁴⁾。次に見てみよう。

元 王元章筆

草迎金勒馬，花醉玉樓人。唐・張子容句

石上開仙酌，松間對玉琴。唐・李瑞句

落花飛廣座，垂柳拂行觴。唐・崔沔句

犬吠松間月，人行洞裏花。唐・盧允言句

停舟搜好句，題葉贈楓林。唐・錢文句

待月人相對，驚風應不齊。唐・馬戴句

海岸耕殘雲，溪沙釣夕陽。唐・皇甫冉句

興攜無灑掃，隨意坐莓苔。唐・李太白句

春卜は画題についてかなり熟慮したようである。彼はまず「唐詩ノ意図」という大題目を決め、それから小題目としてそれぞれの絵に二句の詩句を付け加えた。明らかに詩題より二句の詩の方が内容が具体的で分かりやすいのである。こうして比較的バランスよくこの問題が解決できたと言える。

ほかにもいろいろの試みがある。たとえば、詩句の一部を取って画題とする。たとえば、「楓林停車」（『集古名公畫式』巻一）は唐・杜牧『山行』の「停車坐愛楓林晚」という詩句による画題、「寒江獨釣」（また「獨釣寒江」ともいう。『梅雪争奇』巻下、『玄對畫譜』巻三）は唐・柳宗元『江雪』の「獨釣寒江雪」という詩句による画題、「溪水春遊圖」（『和漢新圖扶桑畫譜』巻五）は金・趙閑閑『春遊』の「一溪春水閑何事」という詩句による画題、「紅葉煖酒」（または「林間煖酒燒紅葉」。『芥子園畫傳』第四集，『戲画拔粹一蝶畫譜』巻中）は唐・白居易『送王十八歸山寄題仙遊寺』の「林間煖酒燒紅葉」という詩句による画題、「醉歸家圖」（また「春社日醉歸家圖」ともいう。『和漢名畫苑』初卷）は唐・王駕『社日』の「桑柘影斜春社散，家家扶得醉人歸」という詩句による画題、「落日放船好」（『程氏墨苑』巻六）は唐・杜甫『陪諸公子丈八溝携妓納涼晚際遇雨二首』の「落日放船好，輕風生浪遲」という詩句による画題、「東籬採菊」（また「淵明採菊」ともいう。『吳友如畫寶』第一集，『画

題辞典』)は晋・陶淵明『飲酒』の「採菊東籬下, 悠然見南山」の詩句による画題である。

また, 詩題に数文字を加減し画題とする。「瀟湘歸雁圖」(『和漢新圖扶桑畫譜』卷一)は唐・錢起の『歸雁』による画題, 「雪中圖」(『畫典通考』卷四)は唐・孟浩然的『赴京途中遇雪』による画題, 「大庾嶺梅花圖」(『和漢新圖扶桑畫譜』卷三)は元・伯顔の「度梅関詩圖」による画題で, 「杜子美春遊圖」(また「杜甫遊春」, 「杜子美沽酒遊春」ともいう。『古文正宗』, 『埒江集』, 『和漢新圖扶桑畫譜』卷五)は元・程鉅夫の『少陵春遊圖』による画題である。文字の増減はあくまでわかりやすいためである。

以上, 一部の画題の例を取り上げてみたが, いずれも先哲達は画題を意識しながらの試みである。我々にとって今後画題と詩題を考え

るうえで極めて示唆的である。『唐詩選畫本』には膨大な数の中国画題があるので, 統一に名づける必要があるかと思われる。一つの選択肢は前掲した大岡春卜のように, まず大題目「唐詩の意」をつけて, それから唐詩の最初の一句を小題目としてつける。あるいは大題目の下に詩人の名前を冠して「○○○」という小題目をつける。これはあくまで私の私案である。

【注釈】:

- (1) 『御定佩文齋書畫譜』卷八十一「唐王維藍田煙雨圖」(四庫全書子部・芸術類)
- (2) 大庭修編『宮内庁書陵部蔵舶載書目』には『唐詩選畫本』が記載されていないものの, ほかの唐詩選本が豊富に記載されている。ご参考まで次に【表7】にまとめた。これによって, 江戸時代に唐詩選本輸入状況の一斑が窺われる。

【表5】

冊 数	卷 数	時 間	書 目
第一冊	第三卷	元禄十二年	唐三體詩一部六本, 唐詩艷逸品一部四本四卷, 唐詩嶺雲集三本六卷
第三冊	第一卷	元禄十五年	唐詩選脈箋釋會通評林共二十本
第八冊	第十二卷	寶永七年	唐人選唐詩
第九冊	第十三・十四卷	正徳一年	唐詩正六本共二十六卷
第十冊	第十五・十六卷		唐詩韻滙, 唐詩韻滙(滙)六十四本共百五十三卷, 唐詩紀, 唐詩飯, 唐詩品彙
第十一冊	第十七卷	正徳三年	唐詩類苑選, 唐詩彙選
第十四冊		享保九年校閲	刪定唐詩解一部十套十本二十四卷
第十六冊		享保十一年校閲	唐詩解五部各一套十冊, 唐詩鼓吹一部三本, 唐詩韻滙一部十二本
第二十一冊		享保十二年校閲	唐詩三集合編一部六本七? 四卷
第二十五冊		享保七年校閲 享保七年校閲 享保八年校閲	唐詩貫珠箋二十四本十二冊六十卷 刪訂唐詩解十本二十四卷 唐人詠物詩選一部六本十二卷
第三十冊		享保二十一年校閲	唐詩鯨碧八卷四本
第三十一冊		元文四年監閲	唐詩合解箋注一部一套六本, 唐詩所一部二套二十本四十七卷, 唐詩類苑二部各八套六十四本

- (3) 中島敏夫『唐詩選』(中国の古典27, 学習研究社昭和57年12月37-38頁)
- (4) 村上哲見『『唐詩選』と, 嵩山房 — 江戸時代漢籍出版の — 側面』(『日本中国学会創立五十年記念論文集』, 汲古書院, 平成10年10月, 1240-1241頁)
- (5) 清・永瑤等撰『四庫全書総目』卷一九二・集部, 総集類存目二(中華書局影印本下冊, 1965年6月1749頁)
- 紀昀は次のように述べている。

舊本題明 李攀龍編, 唐汝詢註, 蔣一葵直解。攀龍有詩學事類, 汝詢有編蓬集, 一葵有堯山堂外紀, 皆已著錄。攀龍所選歷代之詩, 本名詩刪。此乃摘其所選唐詩。汝詢亦有唐詩解。此乃割取其註。皆坊賈所爲。疑蔣一葵之直解亦託名矣。然至今盛行鄉塾間, 亦可異也。(旧本に明の李攀龍が編集, 唐汝詢が注釈, 蔣一葵が直接解釈と題とする。攀龍には『詩学事類』があり, 汝詢には『編蓬集』があり, 一葵には『堯山堂外紀』があり, いずれも著作の目録にある。攀龍が選んだ詩集はもと『詩刪』という書名である。この『唐詩選』はすなわちその『詩刪』によるものである。汝詢にはたま『唐詩解』がある。この『唐詩選』は『唐詩解』の注釈を部分的に取り入れたのである。どれも書賈が勝手に作ったのである。おそらく蔣一葵の直接解釈も偽名であろう。しかしながらこの書物はいまだに田舎の塾の間に流行っている。それもまた不思議なことであろう)

- (6) 漆山又四郎『繪本年表』五(日本書誌学大系 34 (5), 青裳堂昭和61年1月142頁)
- (7) 高木正一(『唐詩選』下, 朝日新聞社昭和41

年11月)

- (8) 石峯道人(橘貫)書・画『唐詩選畫本』一編・卷一(筆者所蔵, 文化乙丑[1805]再刻本)
- (9) 有木大輔『『唐詩選画本』について——葛飾北斎と高井蘭山の起用』(『アジア遊学』No116 特集「漢籍と日本人Ⅱ」, 勉誠出版2008年11月118頁)
- (10) 清・永瑤等撰『四庫全書総目』卷一一四・子部, 芸術類存目(中華書局影印本上冊, 1965年6月976頁)
- (11) クリストフ・マルケ撰, 瀧本弘之訳「十七世紀中国画譜の日本への伝播について」(『日中芸術研究』第38号, 2012年12月80頁)。なお, マルケ氏論文の中国訳は台湾故宮博物館『故宮文物月刊』第305期にも見られる。
- (12) 簡野道明『唐詩選詳説』下(明治書院, 昭和4年10月726頁)
- (13) 近藤春雄『中国学芸大事典』(大修館書店, 昭和53年11月50頁)
- (14) 大岡春卜『畫史會要』(寛延4年[1751]刊本, 国会図書館所蔵)

【図版】:

1. 『唐詩選畫本』(文化乙丑再刻本, 筆者所蔵)
2. 『唐詩畫譜』(明萬曆年間集雅齋刻本, 名古屋市蓬左文庫所蔵)
3. 『木本花鳥』(『八種画譜』, 美術出版影印本, 国立公文館内閣文庫所蔵)

【付記】

本論文の【表3】をまとめるにあたって高田眞菊先生の御教示を頂いた。ここに感謝の意を申し上げます。